

レーガンのエピソードとしてのブッシュ

高成田 享

ブッシュ大統領が理想としているのは、レーガン大統領だと思う。ブッシュ家の長男という重荷から逃げようとしながらも、逃げ切れなかったジョージ・W・ブッシュ大統領にとって、「父殺し」の最後の手だては、父親の師匠である、レーガン像にかぎりなく自分を近づけ、父を超えることだ。

父ブッシュは、有能な副官といったイメージで、レーガン大統領を副大統領として支えた。大統領になってからは、レーガン大統領の保守主義を中道寄りに戻し、国民的な支持を得ようとした。しかし、再選をめざす 1992 年の大統領選では、リベラルから中道にすり寄った、民主党のクリントン候補に中道の票田を奪われ、共和党の中核ともいえる保守層からは、頼りがいのない候補とみられ、落選した。再選をめざし敗れた大統領は、民主党のカーター大統領にしても、当然のことながら大統領としての評価は低い。

長男のブッシュは父ブッシュと違って、レーガン流の保守主義を鮮明に出して、中道よりの政策で国民の多数派にすり寄りよりも、威厳のある大統領を演じることで、国民からの尊敬と人気を得ようとしているように見える。しかし、レーガンの時代は、英国のサッチャー政権や日本の中曽根政権など、「新保守主義」の政権が規制緩和や官業の民営化などを通じて、資本主義経済の活性化を図った時代。これに対して、いま資本主義を活性化させるかぎは、情報技術（IT）やバイオテクノロジーなどにあり、レーガン路線を追い求めることは、レーガンのエピソード（追従者）として、時代錯誤の喜劇を演じることになるだろう。

ブッシュ政権の支持率が低迷しているのは、景気がかんばしくないうえに、いまや国民的な合意ともいえる環境保護に関連して、アラスカやメキシコ湾での石油採掘を認めようとしたり、京都議定書からの離脱を表明して地球温暖化に背を向けたりしたことが影響している。国民の環境問題に対する真剣さを、ブッシュ政権は見誤ったとしか思えないが、それほどのリスクをおかさせるほど、ブッシュ政権は石油産業を中心とするエネルギー産業に肩入れしている、ということだろう。

ブッシュ大統領の経歴のなかで、テキサスで石油会社を経営、失敗寸前に父親の知人が経営する企業に売却して、難を逃れたことはよく知られている。チェイニー副大統領も就任する直前までは、石油会社の経営者であり、両者の勢力基盤がテキサス州ということを考えても、ブッシュ政権が石油ビジネスの利害を意識していることは容易に想像できる。

しかし、21 世紀が新しいエネルギー革命の時代であることは明らかだ。ガソリンなどの石油類を燃焼させて機動力を得る「熱いエンジン」は、アルコールや液体水素などを分解させて電気を得る「冷たいエンジン」に置き換わられる時代がやがてくる。次第に効率を高め、価格も下がっている燃料電池と「冷たいエンジン」とが組み合わせられていけば、車だけでなく、家庭用の自家発電なども含め、この技術が地球規模で広がることになるだろう。

環境保護という視点だけでなく、世界的なビジネスを考えても、新しいエネルギー技術の重要性は明らかで、ブッシュ政権が古いエネルギー

一産業に肩入れすればするほど、新しいエネルギー技術の世界的な競争に遅れをとることになりかねない。ブッシュ政権がもつ「古さ」が米国の今後の経済発展を阻害するおそれがある、ということだ。

同じことは、胚性幹（ES）細胞の研究についてもいえる。ES細胞は万能細胞ともいわれ、あらゆる細胞や組織に分化していく潜在的な可能性をもつもので、この研究が進めば、人類は悪くなった細胞や組織、器官を、この万能細胞を使って再生したり、取り換えたりできるようになるといわれている。クリントン前政権は、不妊治療などで作られた受精卵で、治療が終わるなどして不用になった受精卵から得た、ES細胞を使った研究については、公的資金の助成を認める方針を示した。これに対して、妊娠中絶の反対など、保守派の理念を支持するブッシュ大統領は、ES細胞を使った研究に消極的で、クリントン政権よりも助成できる研究の範囲をさらに厳しく狭め、現在あるES細胞の系統については、助成対象として認めたが、新規のES細胞を使っての研究への助成は認めない方針を示した。

「現在あるES細胞は、不妊治療などの過程で不用になった受精卵がもとになっていて、しかも、生命としては育てない、という決断がすでに終わったものである。したがって、こうした細胞を現に難病で苦しんでいる人びとの治療に役立てることは許される」というのが、ブッシュ大統領が限定的に公的な助成を認める、というのに使った論理。受精の瞬間を生命の誕生とみる保守派の理念にも配慮しながら、研究にも道を開いておく、というのが大統領のねらいだった。保守派の顔を立てようとするれば、これがぎりぎりの決断だったといえる。

しかし、ブッシュ大統領がこのガイドラインを示したあと、医療技術界からこれに対して疑問が続出している。ブッシュ大統領は、このガ

イドラインで利用できるES細胞の系統が約60あると延べた。しかし、それらは、さまざまな研究所が所有しているもので、外部の研究者がたやすく利用できるものではない。そのうえ、これらのES細胞のなかには、質が悪く、万能細胞として分化する能力が低かったり、受精卵から取り出したES細胞を培養して増殖させる過程で、ウイルスなどに汚染されている可能性があったり、研究者の需要に応えるものばかりではないことが次第にわかってきた。

また、この研究がさらに進んで、治療の実践段階になれば、不妊治療の副産物としてのES細胞ではなく、患者と同じ遺伝子をもった、クローン胚から取り出したクローンESのほうが、拒絶反応などに対して有効になりそうだ。この分野の研究も手足を縛ることは、研究を遅らせる可能性が強い。

研究者たちは、もっと自由にES細胞を使えるように求めているが、ブッシュ大統領が保守派の意見を尊重するかぎり、さらなる緩和は難しそう。バイオテクノロジーは、いまもっとも急発展をとげている分野で、次の3分野が有力な研究分野になるといわれている。ヒトゲノムから遺伝子を読みとり、それを病気の治療や予防にあてる遺伝子技術、ES細胞から病気やけがでだめになった細胞や組織、器官を再生させる幹細胞技術、そして、片方の親と同じ遺伝子をもつ人間や動物をつくるクローン技術だ。

なかでも、幹細胞技術は、ほかの技術に比べて実用化が早いと予想されるもの。それだけビジネスチャンスが目前に広がっているとみえるわけで、この研究を制限すれば、それだけチャンスは少なくなる。ここでもブッシュ政権の保守理念が経済に負の影響を与えている、ということになる。

2002年の中間選挙をにらんで、ブッシュ政権

がこれまでよりも中道寄りの政策に軌道修正する、との観測も流れはじめている。レーガン流の保守回帰をあきらめて、ビジネスへの影響も考えた、プラグマティズムを重視するようになるかもしれない。それには、保守思想や古い産

業への依存からの脱皮が必要なわけで、ブッシュ大統領のこれからの決断が注目される。その物差しとして、エネルギーとES細胞のゆくえをにらむ必要があるだろう。(2001/8/28)